

選評 角田光代

一行の多様さ、読むことの自由

井上紗良さんは『星の王子さま』から「星々が美しいのは、ここからは見えな
い花が、どこかで一輪咲いてるからだね
……」という一行を選び、自身が興味を
持つ廃墟について思いをはせる。人々の
暮らしや用途から不必要と見なされ、う
ち捨てられ、忘れられていく朽ちた建物
は、一般的な意味での「うつくしさ」と
は対極にあるけれど、井上さんは、その
廃墟に、内に含んでいる膨大な時間や記
憶、過ぎ去って、二度とは戻らない過去
を見る。そのとき廃墟は、美そのものに
反転する。井上さんはその瞬間をみごと
にとらえた。私は井上さんの文章を読み
終えたとき、無機質な廃墟に、ちいさく
鮮やかな色の花が咲いているのが見えた
気がした。廃墟が、しずかに息づきはじ
めたようにも思った。